

「甘やかし上手なNO.1推しセラピストに執着されて
「今まで我慢してたのになんで俺のモノになってくれな
いの?!」と言われて営業外で初ハメポルチオ集中攻撃で
中出しされちゃう話

桃佳（ももか）：私。しがないOL。趣味もなく出会いもない。4年前に彼氏に振られてからずっと彼氏も好きや人もいなかった。春樹に出会ってから少しだけ人生に潤いができた。

春樹（はるき）：女性用風俗「東京夢夜蝶」に在籍する、口コミ250件・評価4.9を誇るナンバーワンセラピスト。183cmの高身長に、柔らかい笑顔が印象的。お茶目にじやれてきたかと思えば、ふとした瞬間に見せる真剣な表情や大人びた仕草にドキッとさせられる。甘え上手で人懐っこい営業スマイルの裏には、一度好きになった相手を手放せない独占欲と嫉妬心が隠されている。

指名した相手は、店で一番人気のセラピストだった。

「はじめまして、春樹です。よろしくね」

ドアを開けて見上げると、整いすぎた顔立ちに少し身構える。けれど声のトーンは思ったより軽くて、気負わなくていいんだと分かる温度をしていた。

4年間彼氏がいなかった。恋愛にも人肌にも、飢えていたわけじゃない——そう自分に言い聞かせていたはずなのに、気づけば女性用風俗のサイトを何十店舗もネットサーフィンして、キャストのページを行ったり来たり。とある店舗のキャストに絞って口コミを何回もスクロール。そして写メ日記を見て人柄を炙り出す。評価は4.9。この店舗のナンバーワンセラピスト。どうせ利用するなら、

この道の一番の人に触れてもらいたい。それだけの単純な理由で予約フォームに記入していた。



ソファアに座ると、春樹さんはバインダーを片手に隣に腰を下ろした。ふわりと香る、男の人の匂いに思わずドキツとする。

「よいしょっ♪じゃあ改めて、ご指名ありがとうございます、春樹です。」

「ど、どうも…」

深々と頭を下げられて、こちらもふにゃふにゃと頭を下げる。

「じゃ、はじめにいくつか質問させて下さい。このカウンスリングは時間に入っていないので、気にしないでくださいね。えと、今日は初回90分コースですね。」

「は、はい」

「お話口調は、タメ口と敬語…どっちがいいですか？」

「え、えと…じゃあ…タメ口で…」

「はい、わかった！じゃあタメ口にするね？えーと、お名前は…ハンバーグちゃん、でいいかな？」

「あ！ち、違いますっ！お、お店の人に自分の名前知られなくて、それで…！」

「だよね？だよね？」

くすくす笑う春樹さんは、ちょっとだけ耳を赤くしていた。

「も、桃佳です」

「桃佳ちゃん、可愛い名前。本名？」

「はい、本名です」

「ふふ、よかった。桃佳ちゃんって呼んでいい？それとも桃佳がいい？」

「ど、どちらでも」

「じゃあ親しみを込めて、ハンバーグちゃん」

「っ！桃佳でお願いします!!」

「あはは、りょーかいっ。俺のことは春樹でも春樹くんでも、春くんでもなんでもいいよ」

「はる……き、くん……」

「うん、わかった」

そう言うのと、バインダーの紙に何かを書きつけていく。

「なんでここを利用しようと思ったの？」

「彼氏と、4年くらい前に別れて……人肌が恋しくなっちゃって。それで、どうせ利用するならナンバーワンの人に触ってもらいたくなって……」

「ふうん、そうだったんだね。それは光栄だな〜♪じゃあ、今はフリーと？」

「はい、そうです……」

「そっかそっか。じゃあ頑張って気持ちよくしてあげるね」

さらさらとペンを走らせる。

「好きな性感帯はクリトリスなんだね。キスも好きなんだ。うんうん、えーと、あとはある？」

「……えと」

「恥ずかしい？」

「まあ……」

ずいっと距離を詰められて、耳元で優しく囁かれる。

「俺が触って確かめてあげようか。それとも、ここで頑張って白状する？ たとえ
ば——ビラビラが好きとか、アナル舐められるのが好きとか」

「っ……！」

顔が赤くなって、俯いてしまう。

「あはは、かわいいね。じゃあ俺が見つけてあげるよ。…えと、指入れもクンニも丸されてるしオッケー…と。ねえ、質問なんだけど本当にフェラしたいの？ ウェブ予約のときにチェックしてくれてみたいだけ」

「あ、それは…えと…私だけ気持ちよくなっちゃうのは、悪いかなって」

きょとした顔をした春樹くんは、それから慌てたように言った。

「え、いいんだよ！ そんなの気にしないでいいから。俺に、全部任せてほしい」

「そ、そうだったんですね」

「じゃ、消しまーす♪」

ペンを横に滑らせて、フェラの項目に線を引いて消した。

「ふふ、あのさ桃佳ってさ、ドMだね？」

「なんで決めつけるんですか！」

「ん？そりゃもう、わかるよ。お尻ぺんぺんも好きそうだし」

「もうっ！」

くすくす笑う春樹くんは、すっかり調子を狂わされて、何も言い返せなかった。

「よし、じゃあここまで！シャワー浴びてきて？それとも一緒にいいかな？」

「ひ、1人で浴びてきますっ！」

「うんうん、わかった。足元気をつけてね」

◇

お風呂から出ると、カゴにはタオルとバスローブが入っていた。きっと春樹く

んが用意してくれたのだろう。私はそれらに身を包んで戻ると、ベッドにはもう施術用のバスタオルが敷かれていた。

「おかえり、早かったね」

そう言って私の方に向かって来る春樹くんは抱きしめてくれる。久しぶりの男性の抱擁に、体がガチッと強張るのが自分でも分かった。こんなことならお酒でも飲んでくればよかった。

「まだ緊張してる？大丈夫、俺も」

くすつと笑って、震えている手を見せてくれる。プロでも緊張することなんてあるんだ、と少し意外に思った。

「じゃあ俺もシャワー入ってくるから、待っててね。すぐ戻る」

そう言って、頭を撫でてくれた。



シャワーから戻る春樹くんはお揃い……と言ってもホテルの物だけど、そのバスローブに身を包んでいた。ベッドに座る春樹くんはにっこりと笑ってくれた。

「緊張してる？そんな固くならなくて大丈夫だよ。取って食べちゃったりするオオカミじゃないし、怖くないから。ほら、こっちおいで」

ばんばんとベッドを叩かれると私はソファアから移動してベッドに行く。照明がゆっくりと落とされていくにつれ、ドキドキと心臓が速くなる。春樹くんの隣に座ると頬を撫でられ見つめられる。

「…かわいい。やっぱりオオカミになりそ。って…だめか。」

「や、そんなっ…」

俯いた瞬間、顎を攫われて、優しく唇を押し付けられた。ふわふわでやわらかい唇が私の唇をはむはむ♡と優しく啄む。

「んっ…」

緊張で再び体に力が入ると、小さい声で囁いてくれる。

「大丈夫、怖くないよ？今から気持ちいい事するだけだから、リラックスして？」

「は、はいっ…」

ちゅ、ちゅ、と数回啄まれると、唇を舐められて舌が侵入してくる。私はその舌を受け入れた♡

♡

舌が私の舌を絡め取って優しく撫でられるとゾワゾワとした感覚に力が抜ける

「ん…ちゅ…桃佳美味しいっ…♡」

「んんづ、んちゅ…♡はあっ…♡」

歯列を舌で優しくなぞられると、気持ちよさに白目をぐりん♡と剥きそうになる。

「んっ…ちゅ、力抜けて来た？」

「ふっ…あ…♡」

こくこくと頷くと更に春樹くんの舌がゆっくりと奥まで入り、絡め取ってくる♡吸い上げるように深くキスをされ、私は思わず春樹くんの肩に手を添えた。

「ちゅっ♡ちゅう…♡桃佳かわいい…♡」

「んむっ♡はあっ…♡」

唇が離れると、細い糸が二人の間に引ける。春樹くんは少し息を整えながら、私の唇を親指でなぞった。

「息、上がってるね」

「……だって……」

「…かわいい。もう一回いい？」

頷くより先に、また唇を重ねられる。今度はもう少し強く、舌を深く絡めてくる。私は力が抜けて、ふにゃふにゃと体を預けるようにキスを受け入れた♡

「んちゅ……んっ…♡はあ♡」

春樹くんの手が腰に回り、優しく引き寄せられる。胸と胸が密着し、体温が直接伝わってくる。

キスをゆっくりと解かれると、首筋にちゅっ、と軽くキスをされ春樹くんは額を寄せて低く言った。

「っん…、」

「もしかして首弱いんだ。覚えとこ〜♪これ、脱がしちゃうね？」

「っ…」

そう言って、バスローブの紐を解かれ、スルスルと脱がされて組み敷かれると優しい声で囁かれる。

「うつ伏せにゴロンって寝転んで？」

「は、はい」

「よし、じゃあマッサージから始めるね。」

「よ、よろしく願いますっ…」

春樹くんは足元のオイルに手を伸ばして数回プッシュすると、手のひらで伸ばして温める。

「ちょっとヒヤツとするかも」

そう言った直後、足首にオイルが垂らされる。ひやりとした感触に、体がびくっと跳ねた。

「あはは、かわいい反応」

「つ、冷たいからっ！」

「ごめんごめん、すぐあったかくなるから。なんか俺も緊張しちゃって調子狂っちゃうなあ」

くすくす笑いながら、春樹くんの手のひらがふくらはぎを包み込むように伸ばしていく。ひんやりしていたオイルは春樹くんの体温とすぐに馴染んで、じんわりとあたたかくなっていった。

親指でふくらはぎの真ん中をぐっと押し上げられる。痛気持ちいい感覚に、思わず声が漏れた。

「んっ……」

「痛かったら遠慮なく言ってね。桃佳の体のこと、俺まだ全然分かってないからさ。」

「そ、そうですよね……」

素直にそう言われると、なんだか安心した。プロなのに、決めつけずに一つ一つ確認してくれて、少しずつ肩の力が抜けていくのが分かった。膝の裏をなぞるように指が動くと、くすぐったさと紙一重の感覚に、思わず膝を引こうとすると、やんわり押さえられた。

「逃げないで。ちゃんとほぐさせて」

「は、はい……」

「はい、吸って……吐いて……、そう上手」

太ももの付け根近くまで手が上がってくると、心臓がどきりと跳ねる。けれど手つきはあくまで丁寧で、施術の延長線上にあるように——それがかえって落ち着かなかった。

「お尻も意外と凝るの知ってる？座りっぱなしでストレッチしないとカチカチになるんだ」

「んっ…はあっ、ちょっとくすぐりたいですっ」

「そうみたいだね、さっきからお尻にきゅっ♡って力入って可愛くなって思ってたんだよ」

手の甲で優しくお尻を押されて、ふるふると尻肉を揺らしてリラックスさせようとする春樹くん。

「わー、ごめんなさいくすぐったくて…っ」

「あはは、いいよ。ぜんっぜんお尻の力抜けなくて逆に面白いね」

ケラケラ笑う春樹くんの指先は、段々と秘部に近づいて来ていた。オイルを追加して付け根の部分の親指でゆっくりとさすられるたびに、ぐっ、と息を飲む。

「んっ…っ…はぁっ…」

「気持ちいい？」

「へ、変な感じっ…」

「そう？」

むにむに♡と手を滑らせて、おまんこギリギリのところを触られるとドキドキ

と心臓が速くなる♡

「んっ…はぁっ…（このまま手が滑っておまんこに触れられちゃったらどうしよう…♡）」

親指がさらに内側へ滑り、ぷっくりと膨らんだ肉厚の部分を、ゆっくり円を描くように撫でた。クリトリスを直接は触らず、周囲をじっくりと温め上げるような動きにじわじわとおまんこが濡れていく感覚がわかる♡

（や、やばいっ…♡濡れて来ちゃった…♡）

「力抜いて？」

「は、はい…っ」

「はい、吸って…吐いて…そうそう。」

優しくおまんこの周りのお肉をこねくり回されると自然と腰が浮いてしまう♡

「んっ♡…はあっ…」

「気持ちよさそうだね、うんうん、ほぐれて来た。よかった」

すると背中へと手が伸びて背骨の両脇を、指の腹でゆっくりとなぞられると、じわじわと熱が体の奥にたまっていくのが分かった。

「桃佳、力抜けてきた」

「春樹くんが、上手だから……」

「それはよかった」

ふふん♪と得意げに笑う春樹くんは私の背中に顔を近づけて、ちゅ♡ちゅ♡と背面にキスを落とす♡

「んっ…」

「ちゅ…ちゅう♡」

優しく撫でられる背中と、キスを落とされる背中でゾクゾクと背筋を震わせる



「はぁっ…♡」

「ちゅっ♡ちゅうっ…♡」

キスをしながら、再びお尻の方に移動すると優しくお尻の穴周りを親指で撫でられたり、指圧をされると再び力が入ってしまう。

「っん…」

「大丈夫、大丈夫。指入れたりしないよ？」

「はっ、はいっ…」

オイルの音なのか、私のマン汁の音なのか、わからないけれどもぬちっ♡ぬちっ♡
♡といやらしい音が耳に入るたび、腰がふるふると震えてしまう♡

「かわいいねえ…」

「っはあ…はあっ…んっ♡」

アナル周りを優しく撫でられたり、おまんこの横をすり…♡すり…♡と撫でられると、子宮がきゅん♡きゅん♡と疼いてしまう♡

（うう…♡気持ちいい…♡久々に人に触ってもらってえっちな気持ちになっちゃってる♡はあ♡腰動いちゃってるし、きつとクリトリスも期待しちゃってそう♡♡♡）

「じゃあ腰あげられるかな？猫のポーズして？」

「わ、分かりましたっ」

私は言われるがまま四つん這いになると、春樹くんの顔の前にお尻を突き付ける体勢になった。

「や、まって恥ずかしいっ…♡」

「すごく綺麗だよ…」

春樹くんは私の尻肉をれろれろ♡と舐めたり、撫でたり、ちゅっ…♡ちゅっ…♡と吸い付くようにキスを落とす♡

れろれろ♡

すりすり♡

ちゅう…♡ちゅぱっ…♡

「んっ…はあっ♡」

「お尻綺麗だね♡んっ…♡おいしいっ…♡はあっ♡」

（くすぐったいけど気持ちいい♡マン汁垂れてないかな…♡大丈夫かなあ♡）

舌先で膣口の横のぷにぷにしたお肉を優しく舐められると、自然と腰を突き出してしまふ♡

「んっ♡あぁっ♡あー、やばっ…気持ちいいですっ♡」

「気持ちいいの？嬉しい♡」

親指ですりすりとクリトリスの周りのお肉を撫でられて、ピクピク♡と反応してしまふ♡

「っはあ…はあっ♡んんっ♡ごめんなさいっ、お尻ぴくぴくしちゃって…っ♡」
「良いんだよ♡いっぱい気持ちいい証拠だもんね♡たくさんピクピクしよーね？」

ちゅ♡ちゅ♡

すりすり♡

れろれろ♡かぷ♡

「あっ♡（甘噛みされちゃった♡きもちいい♡腰がぞくぞくして…♡あゝだめだめ♡お尻の穴ひくひくしちゃう♡）」

「桃佳のお尻、桃みたいで美味し♡ん…ちゅ…♡♡」

するとおっぱいに手を伸ばされ、優しく包み込まれると、円を描くようにマッサージされる♡指先が時々乳首の近くをかすめ、息が少し乱れた。

「んっ…♡」

「ここ、敏感？」

「……ちよっと、だけ……」

「ふうん…」

お尻舐めるのをやめた春樹くんは私に覆い被さるように体勢をかえると、お尻の割れ目にパンツ越しのちんぽが当てられる♡

「え?! あっ、やっ…♡ そ、そのっ… あ、あたっちゃってます…ッ♡」

「ふふ、ちんぽってすぐわかったんだ♡ えっちなね♡ 嫌なら体勢変えるよ?」

「っ…」

「どうする?」

「そ、そのままで…っ」

「うん♡ わかった♡」

オイルを足して再びゆっくりと乳房を包み込んで、手のひらで優しく押し上げ、円を描くように優しく触ると同時にお尻の割れ目にフィットしているちんぽを擦り付けるように腰を動かされる♡